

カリキュラム改革とその成果

― 派遣留学制度を中心に ―

新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科 小澤治子

Reform of curriculum and its result: Program of studying abroad as a main point

Ozawa Haruko

新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科では、本学が開学して7年目を迎えた2000年度以降に入学した学生を対象に、新しいカリキュラムを適用している。本稿においては、従来のカリキュラムの問題点を指摘することにより、新しいカリキュラムの特色を明らかにする。また新カリキュラムの柱の一つである派遣留学制度の内容を詳述することによって、カリキュラム改革の意義と特色を提示する。

[キーワード] カリキュラム、外国語教育、派遣留学、異文化理解、国際交流

1 はじめに

新潟国際情報大学では、1994年4月の開学以来、情報社会を先導し、国・地域・人間の文化を尊重しつつ、国や地域を超えて人類の福祉向上に貢献する人材の育成をめざして、教育を行っている。特に情報文化学科の教育目標はつぎの点にある。第1に、東北アジア（ロシア・中国・韓国朝鮮）やアメリカを含むアジア太平洋地域をはじめとする世界への理解を深めることである。第2に、国際社会や地球全体の諸問題に対する深い関心をもって積極的に国際社会に参加できる人材を育成することである。以上のような教育目標の実現に向けて、情報文化学科においては議論を積み重ね、カリキュラム改革の実施に向けて努力を行ってきた。本稿においては、新潟国際情報大学情報文化学部情報文化学科におけるカリキュラム改革の特色について、カリキュラムの重要な柱の一つである派遣留学制度を中心に、明らかにしていきたい。

2 カリキュラム改革の必要性

情報文化学科のカリキュラムは、講義科目、地域言語、ゼミナール（演習）の三つの柱によって構成されている。そのうち講義科目は、国際研究、日本研究、地域研究の3分野から成り、地域言語としては、英語、ロシア語、中国語、韓国語のうちいずれかを学生は選択して履修することを義務づけられている（選択必修）。開学年次である1994年度から99年度までに入学した学生のカリキュラム（以下、旧カリキュラム）には以下の特色がみられる。

第1に、学生は選択した地域言語と関連する地域研究の科目を必ず履修しなければならない。たとえば中国語を選択した学生は中国関連の科目（現代中国論、中国文化論など）を各年次ごとに履修することによって、言語のみならず中国の歴史や文化、日本との関係などを体系的に学ぶことが可能になる。他の言語を選択した学生についても同様のことが言える。第2に、外国語教育の特色として、英語が必修ではなかったことがあげられる。学生は英語も含めて4言語のうちのいずれかを選択するため、中国語、韓国語、ロシア語

を選択した学生は英語を履修することではなく、逆に、英語を選択した学生が他の地域言語に触れる機会も事実上全くなかったといえよう。第3に、少人数教育を重視するという観点から、1年次から4年次までのゼミを必修としたことである。学生は教員が提示したテーマの中から最も自分自身の関心に合った内容を自ら選択して、各年次ごとにゼミナールを受講し、四年次には卒業研究を提出する。この点は、開学当初からの情報文化学科におけるカリキュラムの重要な特色であったといえる。

以上のような旧カリキュラムの内容をどのように評価すべきであろうか。旧カリキュラムの何を踏襲し、何を改めなければならないのか。特に少子化時代を迎えて本学、本学科が生き残るために果たして何が必要か。開学から4年が経過し5年目をむかえた1998年度は、大学、また学部、学科の将来のあり方をめぐって、昼夜を問わず連日のように激しい議論が教員間で繰り広げられた年であった。特に情報文化学科において年齢が比較的若い教員の間で献身的な作業と長時間にわたる議論が積み重ねられた結果、2000年度以降入学した学生を対象に新しいカリキュラム（新カリキュラム）が完成した。その特色は以下のようである。

第1に、CEP(Communicative English Program)を導入し、1年次において英語を必修としたことである。旧カリキュラムの問題点の一つは、外国語教育の中で英語が地域言語の一つとして置かれたのみであり、中国語、韓国語、ロシア語を選択した学生が4年間の大学教育を通じて英語に触れる機会を持たずに卒業していくことであった。また英語を選択した学生にとっても、アメリカ研究のための英語なのか、あるいは国際交流の手段としての英語なのか、英語教育の性格がはなはだ中途半端であるという不満があった。新しく導入されたCEPは、コミュニケーション手段としての国際英語を学ぶことによって、学生が国際交流の基礎力を養うとともに、英語との出会いの機会をもつことを目的としている。その特色は英語を母語とする教員による生きた英語の授業であり、さらに徹底した少人数教育であることといえよう。学生はCEPを1年次において毎日受講することにより、アメリカやイギ

リスの文化研究とは異なった、生きた英語を身につけることが可能となるのである。

新カリキュラムの特色の第2は、派遣留学制度である。これについては本稿の後半で詳述するので、ここでは導入にいたった経緯とその趣旨を明らかにしておきたい。先ほども述べたように、旧カリキュラムにおいて学生は地域言語を選択すると同時に、特定地域の歴史や文化などについての講義科目を履修し、地域についての体系的な理解を深めることができるように考慮されていた。しかし、1年次の後期に地域言語を選択して四年次の終わりまでそれを受講しても、外国語の能力向上にはおのずから限界がある。また地域の歴史や文化についての理解も決して十分なものではない。そこで、ロシア、中国、韓国、アメリカへの派遣留学制度を2年後期のカリキュラムの中に組み込み、希望する学生は半年（4ヶ月）留学して4年間で卒業できることとした。そのねらいは、当該国に一定期間生活しながら学ぶことによって、その国の言語能力を向上させると共に、異文化理解を深め国際交流の重要性を体験的に学ぶことである。

新カリキュラムの特色の第3は、ゼミナールを4年間必修として学習その他の大学生活の中心として位置付けていることである。すなわち学生の自主的な学習態度が求められる少人数の討論形式の授業を特に重視し、学生は自分の問題関心（課題）に応じたゼミを選択し、ゼミ教員の指導の下に学習と研究をふかめていく。この点については、旧カリキュラムのやり方を基本的に踏襲したといえよう。

3 派遣留学制度の導入

次に、情報文化学科におけるカリキュラムの柱の一つである派遣留学制度について詳しく述べてみたい。制度を実施する前提として重要なことは、新潟国際情報大学が中国、ロシア、アメリカ、韓国の各大学と交流協定を締結したことである。本学では開学以来、国際交流委員会などにおいて上記各国の大学と交流を行う必要性について、検討を積み重ねてきた。情報文化学科において派遣留学制度の導入を決定したことによって、本学と各国の大学との交流協定締結に向けたプ

プロセスが加速されることになった。すなわち本学情報文化学科からまず定期的に学生を派遣し、各国の大学で学習させることを出発点として各大学と本学との交流を徐々に拡大していくという方向性について本学と当該各国の大学の間で合意されたのである。このように情報文化学科のカリキュラム改革は、本学および本学部全体の国際交流の活性化と連動している点に、特に留意する必要がある。

それではいつ、どのような大学、学部と交流協定を調印したのか。新潟国際情報大学情報文化学部は、2000年4月の北京師範大学歴史学部（中国、北京市）を皮切りに、2001年1月にはノースウェスト・ミズーリ州立大学芸術科学学部（アメリカ、メリーヴィル市）と、さらに2001年4月にはキョンヒ大学国際教育院（韓国、ソウル市）と交流協定の調印を行った。また2000年11月には極東国立総合大学（ロシア、ウラジオストク市）と大学間レベルの交流協定を締結した。交流協定締結の相手先を選定するにあたっては、特に次の点が留意された。第1に、本学学生が一定期間滞在して生活し、学習するという観点から、治安が良好であることが何より重要な点である。第2に、留学生の受け入れと外国人に対する教育において長年にわたる豊かな経験と蓄積があることが求められる。加えて第3に、本学の派遣留学制度に対する理解があること、また新潟との交流の蓄積があることなども相手先の大学を選ぶ上で重要なポイントの一つであった。上記4大学はこうした条件を十分に満たしているといえよう。

ところで派遣留学制度の基本は、学生が留学先で取得した科目を本学における単位として認定し、学生が4年間で無理なく卒業できることにある。もう少し具体的にみてみよう。たとえば極東国立総合大学で履修、単位修得した科目は、本学に留学科目として設置された「留学ロシア語1-4」「留学ロシア特論1」「留学ロシア特論2」「現代ロシア研究(留学)」「現代ロシア事情(留学)」「ロシアの文化と歴史(留学)」「ロシア研究ゼミナール(留学)」に振り替えて本学における単位として認定される。逆にいえば、相手先の大学に本学のカリキュラムの趣旨に合った科目の開講を依頼するという方式をとっているのである。

学生は1年の入学時に制度の概要についての説明を受け、また留学参加学生の体験談などを聞く機会がある。1年次の前期が終わるときにそれぞれが英語、ロシア語、中国語、韓国語の中から学すべき地域言語の選択を行う。後期にはいと各言語の学習が始まり、同時に派遣留学についてのガイダンスが数回行われる。後期の終わり（1月末-2月初め）には、面接等を経てアメリカ・コースに参加する学生が決定され、2年次にはいり、4月初めから5月の連休明けにはロシア・中国・韓国コースに参加する学生が決定する。参加学生には出発までの数ヶ月間、約十回程度行われる各コースの事前研修に参加することが義務づけられている。なお現段階では、アメリカ・コースのみは夏季休暇中約5週間の留学を実施している。アメリカ・コースの今後のやり方については、検討すべき今後の課題の一つあるといえよう。

4 派遣留学制度の実施

1) 2000年度

新カリキュラムの初年度にあたる2000年度において、中国コースのみ第1回目の派遣留学が行われた。すでに述べたように、2000年4月、本学情報文化学部と北京師範大学歴史学部は交流協定を締結した。そこで最も準備の先行していた中国コースについてパイロット・コースとして派遣留学を実施したのである。なお2000年度については、新カリキュラム実施の第1年目にあたるため、2年次の学生には旧カリキュラムが適用される。しかし、本プログラムの意義に鑑みて、旧カリキュラムの学生が北京師範大学で履修する科目を本学で取得する単位として認定することとした。また3年次、4年次の学生についても参加を認めることとしたのである。要するに、新カリキュラムの施行に先立ち、派遣留学の実施に踏み切ったといえよう。

パイロット・コースの実現にあたっては、解決すべき様々な問題があった。第1にどのような授業内容と科目の開講を先方に依頼するかをめぐって、学科内部で詳細な議論を行い相手側と交渉しなければならなかった。第2に、旧カリキュラム対象の学生が派遣先大学で取得した単位の認定をめぐって、長時間におよぶ

議論と作業が行われた。第3に、第1回目のプログラムであるということによって、派遣先における学生の危機管理問題をめぐっては、特に綿密な対応が必要であった。このようないわば手探りの仕事を通じてようやくプログラムは実現にこぎつけたといえる。そして北京師範大学の側が終始協力的な姿勢で本学との交渉に臨んだことは、プログラムの成功の上で欠かすことのできない要因であった。

2000年9月19日、成田空港を出発した総勢30名の学生達は、年が明けて2001年1月27日、帰国の途に就くまではほぼ4ヶ月間の留学生生活を体験した。参加した学生たちの多くが海外に出かけること自体が初めての体験であり、不安と期待に満ちた4ヶ月間であったといえよう。北京師範大学において、学生は中国語の授業と社会・文化関連の授業（講義と学外学習）を受講した。日本での生活では考えられないほど、予習・復習を熱心に行い、出発して2ヶ月も経つと、中国語による講義の聞き取りもかなりできるようになった。学生たちの言語能力における上達の速さは、先方の教員も驚くほどであったという。参加学生は北京師範大学の留学生寮に宿泊して生活し、先方の大学では日本語のできる班主任が学生達の指導と生活面での相談にあたった。また班主任は週に1度、学生の生活態度や学習面での進捗状況をメールによって本学に伝えてきた。さらに本学学生と北京師範大学学生との交流の場も何度か設定されたのである。こうしてパイロット・コースとして行われた本学初めての派遣留学は、無事にかつ成功裡に終わったのである。

2) 2001年度

中国コースの経験を踏まえ、2001年度からはいよいよアメリカ、韓国、中国、ロシアの4つのコースによる本格的な派遣留学が実施されることになった。2001年度は新カリキュラムの2年目にあたるため、対象となる学生は主として2年次生である。ただし同年度についても3年次、4年次生の参加を各コースとも認めることとした。また開講科目の内容や学生の生活面での指導など、前年度の中国の事例を参考に検討が進められた。このように、アメリカ、韓国、ロシアの各コースの準備を進める上で、前年度のパイロット・コースの経験が有用であったことについては言う

をまたない。しかし、3つの国の文化や生活習慣はそれぞれ中国とは大きく異なっている。また4つの言語を履修している学生数も一様ではない。さらにアメリカ・コースについては、他のコースとは違って夏季休暇中のプログラムであるという点にも考慮すべき問題があった。このように4つのコースの内容を検討し、実現に向けた作業を進めていく上で、本学の教職員自身が異文化理解を深める体験をしたといえよう。

各コースの概要を簡単に記しておこう。アメリカ・コースの留学期間は2001年8月6日から9月9日までで、合計17名の学生が参加した。韓国コースは2001年8月30日から12月30日までで、12名が参加。中国コースは2001年9月4日から2002年1月8日までで、15名が参加。最後にロシア・コースは2001年9月16日から2002年1月13日までで、6名の学生が参加した。幸いにして各コースとも特に事故も事件もなく、それぞれ無事全員が帰国した。中国コースは前年度の内容をさらに深化させることができた。各コースの詳細に立ち入る余裕はないので、ここでは帰国後に参加学生がしるした文章の中から、派遣留学の一端を垣間見ておきたい。

「私は刑務所跡歴史館で、すべての韓国人に対して後ろめたい気持ちを持って見学していた。日本のしていたことは知っていたつもりだったが、実際に見るとでは感じ方が違ったのである。――奇麗事抜きで、なぜ私は謝りたい気分だった。韓国人が日本人に反日感情を持つことは当然だと思いながら見学していたら、小学生の団体に一齐に日本語で話し掛けられた。自分達の知っている限りの日本語を使っているようだった。すごく妙な気分だった。日本人が韓国人を投獄し、拷問した跡地で韓国人の子供達が日本人に笑顔で話し掛けてくるのである。想像していた韓国と、思いもよらなかった韓国を一気に体験した一日だった（韓国コース）」。

「世界にはいろんな人がいて、いろんな感じ方がある、考え方や表現の仕方があって、ということを改めて感じた。国が違うことで、その違いを感じることもあった。しかし、日本という中であっても存在していることだ。言葉が通じないのに、伝えたいことが伝わ

る。言葉が通じるのに、伝えたいことが伝わらない。そんなことが多かった。すごく不思議である。言葉が通じない人と向き合う時でも、習慣が違うことに戸惑ったりすることはあるが、なぜか通じるのだ。話せない分、何かを必死に出していたのだろうか（ロシア・コース）」。

の定期的交流など双方向の交流の実現に向けて努力する必要がある。

5 これまでの成果と今後の課題

情報文化学科のカリキュラム改革は2002年度で3年目を迎え、中国は3回目、アメリカ、韓国、ロシアの各コースは2回目の派遣留学を現在実施している最中である。本年度からは2年次生のみを対象に本プログラムを実施し、アメリカ12名、韓国9名、中国17名、ロシア3名の学生達が派遣留学に参加した。すでに述べたことから明らかなように、このプログラムはこれまで多くの成果を挙げてきた。第1に、参加学生の語学能力の著しい向上である。出発直後は挨拶に毛がはえた程度の会話力しかなかった学生達が2ヶ月も経つと、それぞれの言語による講義の内容を理解し始めるようになる。第2に学生自身も記しているように、それぞれの国や地域の歴史や文化について関心と理解を深めるようになった。そして第3に、参加した学生達が国際交流のセンスを身につけて帰国することである。参加学生の多くが、2002年6月に開催されたサッカー・ワールド・カップにおいて、ボランティアとして活躍したことにひとこと言及の必要がある。それぞれの国や地域に短期間であっても滞在し生活した学生達が、心の掛け橋となって地域間、国家間を結ぶ役割を果たす日も、そう遠くないであろう。

派遣留学実施にあたっては、本学、本学部と交流協定を結んだ相手先大学の真摯で協力的な姿勢にまず感謝しなければならない。相手先大学の骨身を惜しまない協力がなければ、このプログラムを実現することはできなかった。さらに本学でアメリカ、韓国、中国、ロシアに国籍を有する4名の教員の昼夜にわたる献身的な努力があって初めて実現にこぎつけたものであったことにも言及する必要がある。すなわち派遣留学制度は、本学スタッフの異文化理解と国際交流の歴史でもある。今後はこの交流をもっと充実させ、教員間